

〇 製剤使用に関する
チーム医療コンセンサスレポート

【はじめに】

がん薬物療法に携わる医師、看護師、薬剤師の皆様へ。

日々、がん患者さんの命と向き合い、最前線で奮闘されている皆様に、心からの敬意と感謝を申し上げます。がん免疫療法（IO 製剤）の進化により、治療の選択肢が広がった今こそ、多職種が一丸となり、患者さんの未来を支える新たなステップを踏み出す時です。この度、皆様の実践力をさらに高めるために「IO 製剤使用に関するチーム医療コンセンサスレポート」を作成いたしました。

本レポートは、IO 製剤における診療の注意点に焦点を当て、初心者から経験豊富な医療者まで実践に役立つ内容を段階的にまとめたものです。最低限押さるべき事項から応用レベルまで、誰もが確実にステップアップできるよう工夫されています。また、患者指導やモニタリング体制、教育資源の整備に至るまで、具体的なアクションプランを網羅し、すぐに現場で活用できる内容となっています。

特に、免疫関連有害事象（immune-related adverse events: irAE）への対応は、診療の質を左右する重要な要素です。本レポートでは、ガイドラインに基づく対応策に加え、先進的な取り組みや現場の工夫を反映し、より実践的なアプローチを提示しています。これにより、皆様が安心して診療に臨み、患者さんに最良のケアを提供できる体制づくりを支援します。

さらに、本レポートは「チーム医療」の真髓に根ざしています。チーム医療は英語で multidisciplinary care と呼ばれ、多職種が患者さんの QOL（生活の質）向上という共通の目的を持ち、領域を超えて協力する医療を言います。職種を超えて協力体制を強化することを横軸に、自分の職種としての専門性を深めることを縦軸とし、その両方を推進することで、チーム医療がより進化し深化することを期待しています。互いを尊重しつつ柔軟に役割を補完し合うことで、患者さんの安心と希望を守るために強固なチーム体制を築くことができます。

がん薬物療法は日々進化し、私たち医療者も常に学び、成長を続ける必要があります。このレポートが皆様の学びと実践の架け橋となり、チーム医療を通じて患者さんの人生に明るい未来をもたらす一助となれば幸いです。

最後に、本レポートの作成にあたり、ご協力いただいたすべての皆様に深く感謝申し上げます。この資料が多くの現場で生かされ、患者さんとご家族にとって希望の光となることを心から願っております。

日本がんサポートイブケア学会
Immuno-Oncology ワーキンググループ長
東 光久

日本がんサポートイブケア学会
Immuno-Oncology ワーキンググループ

WG 長

東 光久

奈良県立病院機構 奈良県総合医療センター 総合診療科

副 WG 長

三浦 理

新潟県立がんセンター新潟病院 内科

委員

赤松 弘朗

和歌山県立医科大学医学部 内科学第三講座
(呼吸器内科・腫瘍内科)

伊澤 直樹

聖マリアンナ医科大学 臨床腫瘍学

磯貝 佐知子

新潟県立新発田病院 看護部

上野 真行

倉敷中央病院 消化器内科

遠藤 美幸

近畿大学病院 看護部

親川 拓也

国立がん研究センター中央病院 総合内科（循環器内科）

久代 航平

新潟大学医歯学総合病院 呼吸器・感染症内科

小長光 明子

北九州市立医療センター 看護部

米谷 賴人

北九州市立医療センター 薬剤課

佐藤 栄一

北九州市立医療センター 肿瘍内科

田尻 和子

国立がん研究センター東病院 循環器科

土屋 裕子

北九州市立医療センター 呼吸器内科

長崎 礼子

がん研究会有明病院 看護部

萩原 智

近畿大学病院 消化器内科

林 秀敏

近畿大学医学部内科学教室 肿瘍内科部門

藤原 季美子

近畿大学病院 薬剤部

松井 礼子

国立国際医療センター 薬剤部

村上 恵理子

和歌山県立医科大学 内科学第三講座（呼吸器内科・腫瘍内科）
和歌山県立医科大学附属病院 肿瘍センター

吉野 真樹

新潟県立津川病院 薬剤部

協力委員

大川 雄太

静岡県立静岡がんセンター 内分泌・代謝内科

大島 至郎

国立病院機構 大阪南医療センター 免疫内科

工藤 慶太

国立病院機構 大阪南医療センター 肿瘍内科

佐々木 治一郎

北里大学医学部附属新世纪医療開発センター

久村 和穂

金沢医科大学 医学部 公衆衛生学

山本 瀬奈

大阪大学 大学院医学系研究科 保健学専攻

目次

IO 製剤使用に関するチーム医療コンセンサスレポートについて	4
このコンセンサスレポートの利用上の注意	7
IO 製剤使用にあたりチームがすべきことの概要	8
IO 製剤使用に際して多職種に期待されること	11
CQ1: 施設として IO 治療を開始するときに準備すべきことはなにか?	14
CQ2: 外来診療において IO 製剤を用いた治療を行う上で必要なことは何 か?	18
CQ3: 夜間、休日などの時間外診療で irAE を見逃さないための対策は何 か。	21
CQ4: IO 製剤投与開始前のベースラインの検査項目はなにか?	23
CQ5: 特殊な背景（自己免疫疾患、造血器・臓器移植、免疫抑制薬使用な ど）を有する患者への IO 製剤の投与について注意するべき点はなに か?	27
CQ6: IO 製剤使用開始時に患者に伝えるべき情報と患者理解度を上げるた めの工夫は何か?	31
CQ7: IO 治療への患者の意思決定、療養環境の支援等に必要な患者情報 の収集、看護師による支援体制で取り組むべきことはなにか?	33
CQ8: IO 製剤投与中、投与中止後の検査項目は何か?	36
CQ9: 患者がセルフモニタリングを継続して実施するために必要な多職 種で取り組むべきことはなにか?	41
CQ10: irAE の治療で使用する薬剤を安全に使用するために整えておくべ き事項は何か?（適応外使用も踏まえて）	43
CQ11: IO 製剤使用患者に関する保険薬局との連携に必要なものは何か?	50
CQ12: IO 製剤による治療を経験したがんサバイバーに対する、望ましい サバイバーシップ支援とは何か?	52
引用文献	55